

第 1 章

研究の全体像

1 本校の校内研究について

本校では、1つの校内研究主題に基づいて取り組む「課題研究」「プロジェクト研究」「調査研究」「寄宿舎の研究」の4研究があり、それぞれが関連している。

課題研究

本校の研究の中心的研究と位置付けている。本校における教育実践等のニーズの優先度などに応じて設定された実践研究であり、日常の指導実践と最も密接に関連する研究である。

寄宿舎の研究

寄宿舎研修部を中心に、校内研究主題及び学校が行う上記3研究の流れに沿う形で取り組むものと位置付けている。また、研究推進委員会を通じて学舎の情報交換や連携を図っている。

調査研究

文字通り、調査による研究である。校内外における教育実践等に関する情報を、資料・統計として調査及び研究するものであり、研究内容に関する専門性の高い部署が担当する。取り組みについては年度当初に検討して決定している。

プロジェクト研究

課題研究だけでは解決できない課題、もしくは別の課題を解決するために、その課題に関係する組織で進めるものと位置付けている。学校教育の動向や本校における教育実践等のニーズに基づく緊急の課題に関する実践的・総合的研究であり、校内部署の横断的なプロジェクトチームを編成して実施することもある。取り組むべき課題があるかどうか、どういった組織で取り組むかといったことは、年度により異なる。

図1 本校の校内研究

4つの研究を進めるそれぞれの研究組織は、研究主題や内容によって変化する（表1）。また、研究の方法としては、理論研修（学習会）、研究授業、事例検討、教材教具の開発・工夫などがある。各研究組織は、研究の内容に合わせて方法を選択し、ときには組み合わせている。

表1 本校の校内研究のあゆみ

	研究主題	概要（主な研究内容）	研究の種類（研究組織）
第1次	【平成9～10年度】 生徒一人一人の発達段階・特性等に応じ社会参加・自立を促す教育課程の編成はいかにあるべきか	教育目標の具現化、教育課程の基本方針、指導内容の選択・組織、個別指導計画の作成、地域環境・素材を生かした教育活動	・課題研究（形態部会、教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第2次	【平成11～13年度】 生徒一人一人が自立し、社会参加できる力を育む授業づくりと教育課程の編成はいかにあるべきか	教育課程の編成、授業の実践と検証、個別指導計画の充実、現場実習及び進路状況の把握	・課題研究（形態部会、教科部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究

第 3 次	【平成 14～16 年度】 生きる力を育む指導の研究	総合的な実態把握、指導課題の具体的 設定と指導内容の関連、単元・題材指 導計画の工夫、個別化と集団化が最適 化された授業作り	・課題研究（学年部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 4 次	【平成 17～20 年度】 授業作りに活かす、教師の専門性の向 上を追求する実践的研究	課題単元の教材開発、作業工程分析の 充実、個別の教育支援計画等の様式及 び作成に関する研究、体力つくりの見 直し	・課題研究（形態部会） ・P 研究（CO+進路部代表、 体力づくり部会） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 5 次	【平成 21～23 年度】 社会参加・自立を目指した働く力の育 成	教科及び領域・教科を合わせた指導の 授業研究、体力つくりの見直し、指導 内容表の検討、教育支援計画・指導計 画・通知表のあり方の整理	・課題研究（学年部会） ・P 研究（体力づくり部会、 研推委、指導計画 WG） ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究
第 6 次	【平成 24 年～26 年度】 社会の変化に対応できる力を育てる 実践的研究	キャリア教育の指針「今養版キャリア プランニング・マトリックスの作成、 指導内容表の検討、作業学習評価の見 直し、教育課程検討、校内組織検討、 事例研究	・課題研究（形態部会） ・P 研究 ・調査研究（進路指導部） ・寄宿舎の研究

（P はプロジェクトの略 / CO はコーディネーターの略 / WG はワーキンググループの略）

校内には教務側の研修部と舎務側の研修部と 2 つの研修部が存在し、校内研究の企画・推進は、互いの研修部が連携し合い、研究主任が調整を図りながら行っている。研修部員も委員となっている研究推進委員会は、4 つの研究が相互に連携して推進されるよう、必要に応じて連絡・調整する、いわばコーディネーター的役割を果たしている。（図 2）

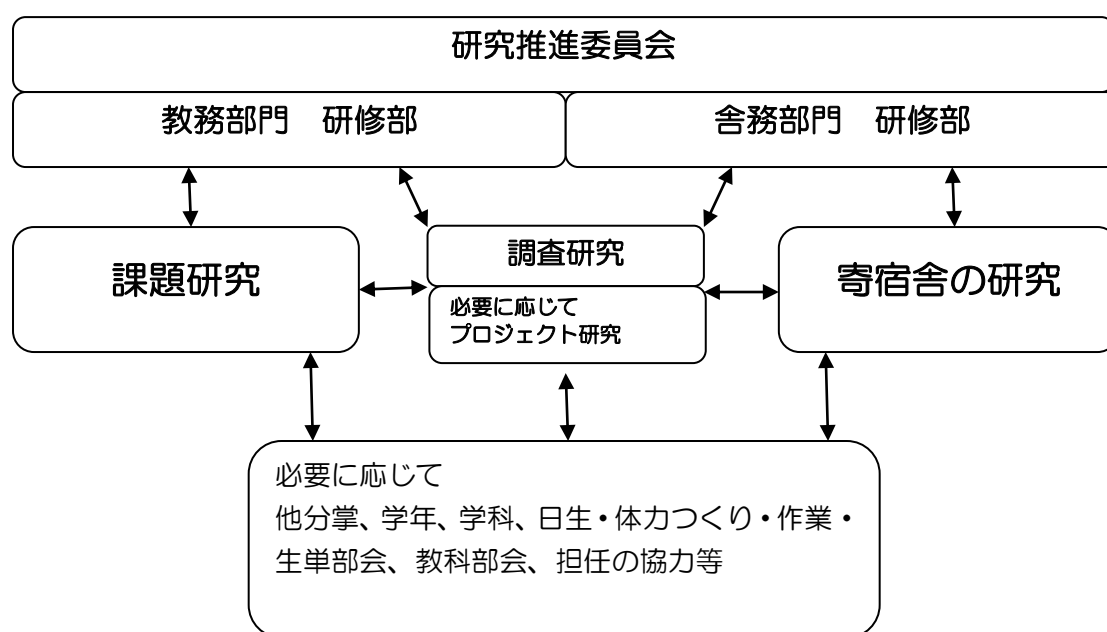


図 2 本校の校内研究組織

2 第7次研究

(1) 研究主題

卒後を見据えたキャリア発達を促す指導法の研究

～協同学習と生活指導の充実を目指して～

(2) 主題設定の理由

本校では進路指導部が中心となり、卒業後の生徒のフォローアップを続けている。進路指導部が実施した調査により、卒業した生徒の姿の一端が見えるようになった。第6次研究で行われた調査研究では、代表的事例として、3つの報告がなされた。それによると、卒業後の生徒が困っていることに「障がい受容の不足」「コミュニケーション能力の不足」「性の指導（異性関係の課題）」「自己認知」が挙げられていた。（本校研究紀要「創」 2015）

特に、どの事例でも共通して「コミュニケーション能力の不足」が挙げられていた。具体的には「言葉などによるコミュニケーションを学ぶ機会を逸してきた。」「他人との関係を従属的（強い者に従ってしまう）、共依存的（自分を守るために特定の人だけにのみ関わる）でしか築くことができない。」などが示されていた。ここにはコミュニケーション能力のみならず、自分に対する自信のなさ、評価の低さも関係していると考えられる。

調査研究では研究の成果として、コミュニケーション能力の向上が課題とされ、授業改善の方法として「協同学習」という学習方法を授業に取り入れることで、生徒は苦手意識をもつことなく、コミュニケーション能力や関わる力を高めることができるのではないかと仮説がまとめられた。

もう1つ注目したのは、「異性関係の課題」とともに考えられる「生活に関わる問題」である。卒業後の生活で崩れないようにするには、自己管理能力の向上と維持が重要なのではないか。

生徒が卒業後に抱えている課題の解決を、生徒自身が取り組むことができるようにする。そのためには、授業または生活場面において、生徒が課題を解決することができるように、生徒が自分で考える場面を少しずつ、意図的に取り入れていく必要があるのではないか。

このような状況と考えをもとに、授業では「協同学習」を、寄宿舍では「自己管理能力」と「生活指導」をキーワードに3年間（平成27年度～29年度）をかけて、卒後の課題解決につながる実践を探ることとし、本校の学校教育目標である「豊かな心と体をつくり、努力する生徒を育てる」の実現に向けて、主題を設定した。

ところで、第6次研究では本校の教育課程において段階的に指導を行うことを目的に、今養版キャリアプランニング・マトリックス（以下、「マトリックス」という。）が作られた。しかし、“働く力”を軸として作成された経緯があるため、作業学習で目標を設定したり評価したりするには活用しやすい面があるが、生活単元学習では活用しづらいことが課題として挙がっていた。

また、平成28年度から変更する学校教育目標に合わせて、マトリックスの内容も見直す必要があること。そして、作業学習や生活単元学習を主とした本校の教育課程においてマトリックスを効果的に活用し、日々の授業、生徒の学び、成長に反映させることを目的として、第7次研究は、「マトリックスの見直しと教育課程との関連付け」をプロジェクト研究で取り組むことを決定した。

(3) 第7次研究の方向性

1 年次	・協同学習を取り入れた授業実践（課） ・行動意義を理解した上での社会スキルの獲得に向けた指導（舎） ・今養版マトリックス（改訂版）の完成（P）
2 年次 （今年度）	・各教科・形態における協同学習の授業実践（課） ・コミュニケーション能力の育成を通じた自己管理能力向上に向けた指導（舎） ・今養版マトリックス（改訂版）と年間指導計画、指導内容表との関連付け（P）
3 年次	・各教科・形態で取り扱うことのできる協同学習の実践集の作成（課） ・自己管理能力を高める生活指導の検証（舎） ・計画に対する評価の方向付け、キャリア教育全体計画の作成（P）

※（課）は課題研究、（舎）は寄宿舎の研究、（P）はプロジェクト研究の略

(4) 2 年次の研究内容

① 課題研究

1 年次は、全員授業研究として、協同学習を取り入れた授業を行った。2 年次は、協同学習授業マニュアルを作成し、各教科・形態のグループに分かれ、全員が共通の観点に立って同じ様式の指導案を作成して各授業で協同学習の要素を取り入れた授業を行うこと。そして、各教科・形態で取り扱うことのできる協同学習について実践をまとめることを行う。

② 寄宿舎の研究

昨年度の研究では、対象生徒個々の課題について実態に応じた指導を行った。2 年次は、コミュニケーションに関わる課題を持つ生徒を選出し、コミュニケーション能力育成に向けた指導法について、5 グループに分かれて検証することとした。

③ プロジェクト研究

1 年次は、今養版キャリアマトリックス（改訂版）を完成させた。2 年次は、マトリックスの要素を盛り込んだ各教科・形態の全体計画を作成し、その後、各指導の形態（生活単元学習・作業学習等）・各教科の年間指導計画と指導内容表に関連付け、内容の関連性の精査を各教科・形態のグループで進めることとした。

(5) 研究推進計画

以上を踏まえ研究推進委員会は、各研究内容の目的や方向性について全職員で共有し、理解した上で進めてもらうことを目的に、計 6 回「研究推進委員会」、計 3 回「全体研修会」を計画した。

① 研究推進委員会

ア 目的

- ・「課題研究」、「寄宿舎の研究」、「プロジェクト研究」それぞれの担当者が連携できるよう

連絡・調整する場として機能させる。

- ・それぞれ担当している研究が他の研究にどのように作用していくかを確認する場とする。
- ・客観的な見方、考え方を取り入れ、確実に業務を進める。

※参加者は、各研究の担当者を対象とする。

イ 日程と主な内容

回	月日	主な内容
1	4/27	第7次研究についての確認
2	6/29	各研究の進捗状況の確認、研究紀要についての確認
3	8/22	各研究の進捗状況の確認、全体研修②の内容の確認
4	10/18	全体研修②の内容の確認、グループ研究実施状況の確認
5	12/ 7	全体研修内容の確認、全員授業研究実施状況の確認
6	2/ 1	全体研修③の内容の確認、各研究のまとめと次年度の方向性の確認

※10/18 と、2/1 については、各教科の研究チーフも招集し、「拡大研究推進委員会」として会議を設定する。

② 全体研修会

ア 目的

- ・本校の各研究の意義や目的、推進方法について理解を深める場とする。
- ・各研究の進捗状況や分析結果を把握し、その後の取り組みに向けて共通認識を持つことを目的とする。
- ・今年度の研究のまとめ、また、次年度の方向性について研究推進委員会が提案し、決議する場とする。

※参加者は、全職員を対象とする。

イ 日程と主な内容

回	月日	主な内容
1	5/ 6	全体提示（本校の研究について、各研究の方針の説明）
2	10/28	中間報告（各研究の中間報告、今後の進め方の確認）
3	2/10	最終報告（各研究の最終報告、次年度に向けて）